

3-2 岸岡 歩

『 三つの国ウォッチング 』

学校名・名前 : 西宮市立神原小学校 ・ 岸岡 歩
実践教科 : 総合的な学習の時間、道徳、国語科
指導時数 : 17時間
対象学年 : 小学3、4年生 対象人数 : 174人

1. カリキュラム

(1) 実践の目的

自分の友だちの国籍について調べ、紹介することで様々な多様性を認め合い受け止める力を身につける。

子どもたちの実態

子どもたちは、何事にも積極的であり多くのことを自ら学ぶ意欲がある。一学期には平和学習の一環として、4年生は地域の方に戦時中の話をインタビューし、平和集会で発表した。3年生は日本とアメリカの友好の象徴である青い眼の人形について調べ、発表をかねて「青い目の人形を迎える会」を計画・実行した。

また、本学年には3年生に韓国国籍、4年生にはインドネシア国籍の児童が在籍している。特に、本校には校区内にインドネシア領事館の方が住んでいるため常にインドネシア人児童が在籍している。編入当時は、上手く言葉も話せずコミュニケーションをとるのに若干苦労していたが、現在は意志の疎通を図ることができ友達となかよく生活できるようになった。しかし、子どもたちはその児童たちを特別視しない反面、インドネシアに対する理解も少ない様子である。また彼ら自身も長く日本に滞在しているため、母国についての実態や現状を十分には把握していない様子も見受けられる。

教材について

本当に互いに信頼し合えるという事は、自分自身と相手を理解する事から始まる。互いの文化や生活を調べていく中で、新たな発見からより相手を、そして自分を知るきっかけにつながってほしい。そこから、相手に対する尊厳と自分の国に対する誇りを持って欲しい。そして、国籍の違いだけではなく様々な多様性を認め合い、受けとめる力を身につけていくことにつなげていく事ができればと考える。そこで今回は、本学年に在籍している児童の国籍であるインドネシア・韓国・日本の三カ国について調べ学習を行っていきたい。

指導にあたって

今回、子どもたちの生活に焦点をあてて、より自分たちの生活との共通点や相違点を比較しやすいようにしたい。インドネシア、韓国、そして日本のそれぞれの子どもたちの学校の様子や遊びなどをテーマとして、調べ学習を行い、それを発表する場を設ける。その際、こちらも本研修で持ち帰った具体物や写

真を提示し、イメージを持ちやすい環境を整えたい。

そして発表の際は、紙面だけを使った発表だけではなく、一緒に遊んだり踊ったり歌ったりといった体も動かす体験活動を多く取り入れて生きたいと考える。本単元を、五感をフルに使う活動を取り入れることで、楽しみながら多文化共生理解や、自分の国に誇りを持つことに対するきっかけにしてほしい。

(2) 授業の構成

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1時限目 インドネシアってどんな国？	パワーポイントを使用し、研修で見てきたもの感じたことを紹介する。	パワーポイント 世界地図 漫画
2時限目 インドネシアの文化にふれよう	インドネシアの伝統楽器であるアングルンの演奏会を鑑賞し、実際に演奏してみる。	アングルン
3時限目 韓国の文化にふれよう	韓国文化の鑑賞会を行ない、衣装・楽器・舞踊などを鑑賞する。	
4時限目 ウォッチングテーマを決めよう	日本・インドネシア・韓国の子どもの様子についてどんなことを調べたいか、テーマを設定する。	ワークシート
5～12時限目 三つの国ウォッチング	テーマごとに児童をグループに分け、更にそこからいくつかの班に分けて調べ学習を行う。	ワークシート 模造紙、 本・インターネット インタビュー
13～16時限目 発表会	調べた事を発表する	模造紙 CD
17時限目 活動報告を書こう	自分が調べて分かった事や他のグループの発表で感じたことを文章にまとめる	

2. 授業の詳細

1時限目 「インドネシアってどんな国？」

子どもが興味を持ちそうなインドネシアの映像や実物を提示し、インドネシアに対する興味・関心を高め、これからの学習の動機付けを行った。そして、これからこの学年の人たちの国籍であるインドネシア、韓国、日本の、特に自分たちと同じ子どもたちの様子を調べていく事を提案した。

インドネシアの民族料理

レストランで食べた民族料理、色合いが東南アジアらしく赤っぽい

見た目は真っ赤ですごく辛そう。

民族衣装

同じレストランで見た衣装

色がきれいで私も着てみたい。

インドネシア語で書かれた日本の漫画

インドネシア語で書かれた「コナン」、舞台は日本なので少し分かります

何が描いてるかわからないけど絵は知ってる。これをインドネシアの子どもが読んでるなんて不思議な感じがする。

ジャカルタの様子

発展途上国だが高層ビルが立ち並び、バイクが道いっぱいに走っている

もっと田舎かと思っていたけど、こんなに高層ビルがたくさんあるなんて意外だった。しかもバイクが道いっぱいに走っていて危なくないのかなと思った。

ハラルマーク

イスラム教信者のためにその製品に豚肉が使われていないことを示すマーク

豚肉を食べてはいけないなんて。

給食では豚肉が入っているかどうか分かりにくいからこんなマークがあったら便利だと思う。

インドネシアの紙幣

日本よりも物の値段が安くてビックリした。

～所感～

写真や漫画・紙幣に対して、とても素直に驚いた様子で話を聞いていたのでこれからの学習のよい導入になったと思う。しかし、この後に調べ学習を計画していたのでどこまでを提示し、どこまでを取って置くかで頭を悩ませた。また、物価が安いことや環境整備がまだ完全には整っていないことを伝える際、インドネシア人児童に対しての偏見につながらないように気をつけた。結果としては、インドネシア人児童は自分の知らない母国の様子や状況を知ったことで非常に喜んでいる様子だった。

2時限目 「インドネシアの文化にふれよう」

領事館からインドネシアや日本で、アングルンというインドネシアの伝統的な楽器の鑑賞会を行っている方たちの紹介を受け、主に3,4年で鑑賞した。ピアノの伴奏をバックに伝統的な音楽をいくつも目の前で演奏してもらい子どもたちも聞き入っていた。また、聴くばかりではなく一人ずつ楽器を手にして3,4年生全員で一つの曲を演奏する機会もあり、これからの学習の更なる動機付けになった。



アングルン演奏の様子



アングルン演奏中の子ども達の様子

3時限目 「韓国の文化にふれよう」

本校は、文化鑑賞会という学校行事を設け、様々な音楽や演劇の鑑賞を通して児童の感受性を高め、ていく活動に取り組んでいる。

そこで、今回の文化鑑賞会は韓国の文化に触れる目的で、在日の方と韓国から来られた方たちによる韓国の文化を紹介しているグループを招いた。その中で、韓国の伝統的なチマ・チョゴリや貴族の衣装、言葉、昔話を元にした演劇、舞踊、楽器の演奏など多くの韓国の文化を紹介していた。



文化鑑賞会

子どもたちは長時間にもかかわらず、集中して鑑賞し、韓国の文化に興味を持っていた。

韓国の女の人の衣装は髪の毛がとてもきれいにあんであって驚いた。

踊りがとてもきれいだった。

～所感～

以上のように、調べ学習を行う前に本国の人を招き、生の文化に触れられたことは児童にとってとてもよい動機付けになった。やはり私が各国の文化を紹介しただけでは子どもたちは実感をもつことができないだろうし、意欲にも影響を与えてくると思う。今回調べる対象の国であるインドネシア・韓国双方の文化に触れる機会があったということはとても意味があったと思う。その反面、また次回同じ実践を行う場合、今回と同じような環境に恵まれることは少ないと思うので、次回からも、その場や機会に応じた工夫や取り組みが必要になってくると考える。

また、今回私は、うまくこの関係を活用することができなかったが、調べたい国の方と関わりを持つことは、今後の調べ学習の際、インタビューや手紙のやり取りなどで情報交換ができるなど今後の活動を見据えた意味でも価値があると思う。

4時限目 「ウォッチングテーマを決めよう」

3時限目までの文化の紹介を踏まえた上で、3、4年生、みんなの国であるインドネシア・韓国・日本について調べることを提示した。その中で、自分たちとかかわりの深いことの中から、自分が調べたい事を書いたアンケートを取り、グループわけを行った。その結果、以下の5つのグループに分け、それぞれが三つの国について調べることになった。

- ・ 学校(児童の様子・校舎・授業など)
- ・ 遊び(伝統的な遊び・室内・室外・人気のある遊びなど)
- ・ 音楽(楽器・伝統舞踊・歌など)
- ・ 食べ物(伝統料理・調味料・果物など)
- ・ 国土(宗教・文化遺産・地理など)

～所感～

教師側からグループを提示するのではなく、子どもたちの意見に即してグループ分けをしたことは子どもたちの意欲を損なうことなく、活動できたのでよかったと思う。しかしながらどのようなグループ分けになるのか予測できないところもあった。また、教師や人数の関係から5つのグループに決めてしまったことで、自分が本当にしたいことができるグループになったか疑問が残るところもある。

5～12時限目 「三つの国ウォッチング」

5つのグループをさらにその中で一班が5,6人になるように5～6班に分けた。そして、各班にリーダーを決めて、その子を中心に調べ活動を行った。5人の担任は自分のクラスのみを受け持つのではなく「学校グループ」ならば二学年すべての児童の中で学校について調べたい児童を一つの教室に集め、その子どもたちに対し授業を行う形をとった。調べるメディアとして用いたものは、書籍・インターネット・私やそれぞれの国籍を持つ児童の保護者に対するインタビューなどであった。それぞれテーマ毎の1つのグループを受け持ち、調べ学習を行う形をとった。2学年が同じことについて合同で調べ学習を行う機会は初めてだったが、お互いに刺激しあいながら学習を進めていた。

インドネシア・日本・韓国のじゃんけんを調べました。インドネシアと韓国のじゃんけんの手は日本とちょっとちがうので、(手の)絵を描くのは難しかったです。なかなか韓国の果物についてが分かりませんでした。

～所感～

まず、最初の反省としてあげられるのは、それぞれの国の資料がどれほど手に入るのかが教師側にも未知数であったことだ。特に、韓国に関しては実際に行って情報を手に入れることができなかつたため、情報量が不足していたところがあった。また、調べる範囲がテーマを絞ってグループを構成したとはいえ多岐にわたっており、教師側も子どもから調べたい事柄が出てからそれをどのように発表すればよいかを練っていったため、若干先行きが不透明な部分があった。しかし、子どもたちとともに調べていく中で、日本においてはもちろんのこと実際にインドネシアで研修をしてきた私にとっても多くの発見があった。これは、どのような方向性で学習していくかを教師が固定せず、ある程度子どもたちに任せたことが生んだ結果だと思う。

また、今回の調べる国の対象を「僕はインドネシアのみ」など1つに固定化しなかつたことはとてもよかったと思う。三つの国を同時に同じテーマで調べることによってよりそれぞれの国の文化を子どもたちが意識的に比較しながら、学習を進めることができたと思う。この単元のテーマはあくまでも子どもたち一人ひとりが様々な国の文化に触れ、多様性を認めることを目的としているため、三つの国を同時に調べていく方法はとても効果的だったと思う。しかし、比較を発表の中心としているために、三つの国のうち二つは調べられたがもう一つの国の比較される事柄を調べることができず、抜け落ちているということがいくつかあったという問題もある。子どもたちの反応を予測し、もっと幅広く各国の状況や文化を調べておけばさらに子どものニーズに合った助言ができたかもしれない。特に、書籍に関してはインドネシアと韓国に絞った文化や地理の内容が掲載されているものが図書館の中に非常に少なく、急きょ近隣の中学校から借りるなどの措置をとった。次回、同様の実践を行う場合どのような国籍を持った児童が担当学級に在籍しているかによって必要な情報はおそらく変化するため、上記にもあるように調べる資料をどれほど集めることができるかが問題になってくると考えられる。



13～16限目 「発表会」

時間は1班3～4分程度とし、全員が何らかの形で発表に係わるという約束をした。発表は二日間に分け、一日目は学校・国土・食べ物グループが大教室で調べたことを模造紙に表を書いたり絵を画用紙に書いたりして発表を行った。二日目は体育館で残った二つのグループが同様に模造紙などを使い発表した後、音楽グループがみんなで体を使いながらインドネシアの舞踊や各国の歌を歌い、遊びグループが各班で調べた各国の遊びでみんなに遊んでもらうという、いわば知識型と体験型を分けて発表するという形で行った。

発表の詳しい内容は以下の通り

- ・ 学校...校舎・きまり・授業・子どもの様子・学校の道具・時間
- ・ 食べ物...よく食べる物・昔食べていたもの・果物・お菓子・飲み物・調味料
- ・ 国土...地理・宗教・言葉・文化遺産・災害
- ・ 音楽...お祭り(ダンス)・楽器・歌
- ・ 遊び...伝統遊び・人気の遊び・室内遊び・屋外遊び

特に分かったことはそれぞれの国の遊びです。こんな遊びもあるのだと、とても勉強になりました。一番うれしかったことは「みんなで遊ぼう」でいっぱい並んでくれたことです。みんな楽しそうでした。歌グループや踊りグループが楽しい企画を考えてくれて、私たちもいっしょに踊ったり歌ったりできて楽しかったです。

～所感～

どの子ども、一生懸命調べた国だったので、関心を持って聞き入っていた様子だった。発表形式も、不十分ながら比較を用いたものだったので、聞いていても分かりやすい発表になっていたと思う。また、2日目に体験活動を取り入れたことで、1日目と2日目にメリハリができたこともよかったと思う。舞踊をみんなで踊る際に、インドネシア人の児童が先頭に立ち、踊りを紹介していたので、子どもたちがその子の意外な部分を見ることができ、その子自身も母国の文化に対して誇りを持つことができた良い機会だったと感じた。



発表会の様子1



発表会の様子2

17時限目 「活動報告を書こう」

この総合的な学習の単元で行った活動を合科として国語の時間に、文章で紹介した。自分たちが長期にわたり力を入れてきた活動だったので文章も予想よりも内容の濃いものとなった。この時間で国語の書く力を鍛えるだけでなく、今回の学習で子どもたちがどのような感想を持ったのかを知るいい機会にもなった。特に今回は担任が全グループを見ることができなかつたので活動内容を知ることができた。

3. 成果と課題

今回、教師1年目でこのような貴重な経験ができ、しかも授業実践までできたことは自分にとってとてもプラスになることだと思う。私は、自分自身が児童・生徒として学校にいる中で日本以外の国籍を持つ児童・生徒と出会ったことがなかったし、それを当たり前だと思ってきた。しかし国際化は進み、もはや外国人児童がクラスの中にいることが当たり前になってきた。このような現状にも拘わらず、私の国際理解教育に対する認識は甘く、外国人児童に対しても豊かな国際感覚を身につけた子どもを育てることに關しても特別手立てを考えていなかった。しかし、今回の研修及び実践を行って改めて国際理解教育の重要性に気づかされた。互いの違うところを認め合い、自分自身に誇りを持つことに自分と相手の生まれた国の文化を知ることは必要不可欠なものである。だが、特に、日本に住んでいる外国人児童にとって母国に誇りを持つことは容易ではない。そのアイデンティティーを確立するためにも小学校で母国について調べることができたこと、また他国の文化を調べる経験は貴重であることを身をもって再確認した。

さて、今回授業実践を行った中で得た成果は二つある。一つ目は様々な国に対し子どもたちが興味・関心を持つきっかけを作れたこと、二つ目は世界の現状を少しでも自分の目で見るることができたことだ。

上にも書いたように、世界はすごい速さでグローバル化が進んでいる。その中で自分の、そして他国の文化や伝統を比較しながら調べたことを発表するという経験は必ずその子の世界に対する認識に影響すると思う。また、今回の単元で他国の文化に触れる楽しさを経験できたことで、違う国の文化や言語を学ぶ喜びにもつながってほしいと願う。

また、私は海外に行くこと自体初めての経験だった。世界の現状についてはメディアを通してしか手に入れることができなかった。しかし、今回研修として海外に行く機会を与えてもらい、少しは各国のおかれている状況を肌で感じることはできたのは、私にとって大きな成果だった。特に今回は青年海外協力隊の活動を視察する中で、なかなか個人では知ることのできないその国の抱えている問題を垣間見ることができた。この経験は本単元だけではなく、自分が教師という人にもものを伝える職を続けていく上でとてもいい刺激になった。

課題は山積みなのだが、特に取り上げるとするならば、情報の収集の仕方とそれをどう子どもに利用させるかということだと思う。日本国内なら教師のこれまでの日本での経験も生かせるし、また調べる方法もたくさん存在する。しかし、海外の、特に子どもたちの生活に密着した情報はなかなか収集しにくい。また、一つの国の中にも多様な文化や民族のいる国もある。特にインドネシアは大小多くの島からなる国であり、非常に多くの文化が存在する。私の集めてきた情報と書籍の情報が違っていたりすることもあった。日本でも、インドネシア・韓国でも一つ一つの学校や子どもの置かれている状況・環境は異なるものである。だから比較をする際、この事柄はその国全てにあてはまることなのか、それともこのケースのみにいえることなのかを教師自身も見極めることが難しく、またそれを子どもに伝えるのにも苦労した。こちらが事前に情報を取捨選択しきちんと子どもに伝えられる形を大まかにでもいいのでとることは必要であった。

このことは、今後全ての授業を実践していく上で常に考えなければならないことだと感じた。